

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009～2010

課題番号：21820051

研究課題名（和文）七代目市川団十郎をめぐる観客と贔屓の実態に関する調査・研究

研究課題名（英文）Research on actual condition of favor with the audience surrounding  
Ichikawa Danjuro VII

研究代表者

木村 涼 (KIMURA RYO)

早稲田大学・演劇博物館・助手

研究者番号：70546150

研究成果の概要（和文）：

申請者は、本研究において、近世後期の代表的な江戸歌舞伎役者七代目市川団十郎（寛政3年（1791）4月～安政6年（1859）3月）を取り巻く観客・贔屓の実態の解明に努めた。まず、七代目の代表的贔屓連「三升連」の存在形態を示す狂歌集の内『團十郎七世嫡孫』、『江戸紫贔屓鉢巻』の内容の検討、宿屋飯盛率いる狂歌集団「五側」が市川家と由縁の深い成田山に寄進した狂歌の扁額など、七代目の支援形態を中心に分析を進めた。七代目の贔屓は、江戸に限らず、北は会津若松から南は長崎に至るまで確認され、職業は様々である。狂歌連では武士も町人も役者も藩主でさえもペンネームを用いることで狂歌師に変身を遂げる。そうすることによって、江戸幕府の身分制支配秩序を超越し、七代目を支援するという同一目的を持った新たな社会の成立がみとれ、七代目の支援基盤の構造が明確になった。

研究成果の概要（英文）：

The applicant has elucidated the actual condition of the audience and patrons of Ichikawa Danjuro VII, a leading kabuki actor in the early modern period. This study explores mainly two comic tankas and a frame picture in order to investigate a form of support to Ichikawa Danjuro VII: "Danjuro VII Chakuson" and "Edomurasaki Hikihachimaki" the anthologies of comic tankas which show the formation of "Mimasu-group", the leading patrons; and a frame picture dedicated by "Gogawa-group" led by Meshimori Yadoyano to Naritasan associated with the Ichikawas. As for the patrons of Ichikawa Danjuro VII, it is confirmed that they were active from Nagasaki in the north to Aizu Wakamatsu in the south not only in the Edo era, and their occupation varied. By using pennames, samurais, merchants and actors could transform to comic-tanka poets. They transcended the social system and order under the reign of the Tokugawa Shogunate. Thus, the new society of people sharing the same purpose to support Ichikawa Danjuro VII was established. The structure of the support base for the actor was revealed in this research.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成21年度	1,060,000	318,000	1,378,000
平成22年度	540,000	162,000	702,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：日本近世演劇

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：七代目市川団十郎、観客、鬚眞、文人、成田山

1. 研究開始当初の背景

- (1) 七代目団十郎について、文化～天保期の江戸歌舞伎において中心的存在の役者で、「歌舞伎十八番」を制定した人物であることは知られている。しかし、七代目の研究について、中山幹雄は『市川団十郎文献集成』（高文堂 2002年）で、「七代目市川団十郎は代々の団十郎の中でも重要な役者でもあるにもかかわらず、ほとんど手つかずの状態であつた」と指摘し、「今後の本格的研究が待望される」と述べている。実際、初代団十郎は諏訪春雄『元禄歌舞伎の研究 増補版』（笠間書院 1983年）、二代目は田口章子『二代目市川団十郎—役者の氏神—』（ミネルヴァ書房 2005年）、四代目は渡辺保『四代目市川団十郎』（筑摩書房 1994年）がある中で、七代目についての研究成果は十分とは言えない状況であつた。
- (2) 理由としては二つ考えられた。まず第一は、七代目に関する先行研究として、伊原青々園『市川団十郎の代々』（市川宗家自家版 1917年）、西山松之助『市川団十郎』（吉川弘文館 1960年）、

服部幸雄『市川団十郎代々』（講談社 2000年）などがあげられるが、芸態や芝居内容が概説的に紹介されている程度ですまされてきていることである。

- (3) 第二に、江戸歌舞伎については観客論の研究が進められていないということである。今尾哲也『見物の意識』（『日本の古典芸能』第八巻 歌舞伎、平凡社、1971年）の成果では、文化7年（1810）に出版された式亭三馬著『花江戸三芝居 客者評判記』から、観客の歌舞伎に対する意識分析を行なっているが、観客及び鬚眞の実態にまでは迫っていない。これについて、すでに、服部幸雄「江戸歌舞伎の観客」（『芸能史研究』第50号 1975年）及び鳥越文蔵「歌舞伎研究の軌跡」（『国文学解釈と教材の研究』6月臨時増刊号 1975年）において、江戸歌舞伎を成り立たせている存在である観客に対する研究の遅れが指摘されていた。
- (4) 上記の研究動向を踏まえて、神楽岡幼子は『歌舞伎文化の享受と展開 観客と劇場の内外』（八木書店 2002年）

で、上方役者三代目中村歌右衛門の鬘員に焦点を絞り、観客論を展開させている。神楽岡は、歌右衛門鬘員が残した『許多脚色帖』を中心に、歌右衛門を取り巻く上方の観客及び鬘員の実態を詳しく論じている。

- (5) 神楽岡の様に上方歌舞伎役者の観客論及び鬘員の支援形態の研究が展開されているなかで、七代目を含め、江戸歌舞伎役者の観客論及び鬘員の支援形態に関する十分な研究が進められていないのが現状である。

## 2. 研究の目的

江戸の観客論の遅れを少しでも克服し、進展させるためにも、その手始めとして、七代目鬘員の立川焉馬や式亭三馬、大田南畝、狂歌堂眞顔などの江戸文人が記した七代目に関する著作物を分析していくことが、七代目を取り巻く観客や鬘員の支援形態を知る手がかりとなるであろうと考えた。

例えば、立川焉馬が五代目団十郎を支援するために天明6年(1786)に創設した「三升連」は、七代目になっても鬘員連として活動し、『市川白猿七部集』を残している。この内容を分析すれば、「三升連」に所属している人々の居住地や職業など連の構造も明らかになり、鬘員として七代目にどのような意識を持ち、支援していたかが明らかになるであろうと考えた。

この他にも、大田南畝や狂歌堂眞顔は、「三升連」以外にも独自の「連」を創設し、七代目の芝居空間及び日常生活でも支援すべく様々な行動を起こしているが、その具体的な行動は、江戸文人の日記や書留に数多く記されている。これらの日記や書留の分析も当然必要な作業になると思われた。

また七代目は、江戸三座以外にも、静岡県

磐田、山梨県甲府、長野県飯田、広島県宮島など様々な場所に頻繁に赴き、地元に残っている舞台や仮設舞台で芝居を上演している。こうした地域でも七代目を支援する人々の存在がみてとれる資料が数多く残存しているが、その具体的な支援形態はおぼろげなままである。支援形態を把握するという視点で、地方に残存する資料を検討することがなかった。

申請者はこれまで、七代目に関して主として二つの軸を中心に研究してきた。一つは、七代目の天保改革期の江戸追放と嘉永期の赦免を検討する上で、幕府の政策や七代目の上演演目分析を行ない、芸態論を踏まえながら、江戸の人々との関係を考察してきた。

もう一つは、「成田屋」の屋号に由来のある成田山新勝寺と七代目との関係を考察してきた。七代目の成田山境内興行の意義や、成田山の江戸出開帳中に、成田山本尊の不動明王を演じる七代目の役割を台帳分析を行ないながら検討してきた。

こうして研究を進めるうちに、七代目を支援する人々の実態が十分に明らかにされていないことが、大きな問題として浮上してきた。この課題を追究することは、七代目市川団十郎の全体像を示すための新しい研究になり得ると確信し、本研究を着想するに至り、近世後期における観客・鬘員の実態を具体的に追究することを目的とした。

## 3. 研究の方法

本研究の目的を達成するためには、七代目市川団十郎と観客との関係及び鬘員の支援形態に関する資料を調査、選定していく必要があった。七代目を支援する江戸文人が著した資料や七代目の地方興行の観劇記録などが所蔵されている図書館・資料館・博物館において現地調査を行なった。

調査に赴いた先は国内に限定されるが多数あり、東京都立中央図書館をはじめとして、成田山仏教図書館、成田山霊光館、成田市立中央図書館、静岡県磐田市竜洋支所「地域史編さん室」、山梨県立博物館、愛知県名古屋市蓬左文庫、同県西尾市岩瀬文庫、東北大学図書館狩野文庫、大阪府立中之島図書館、京都大学図書館、広島県立歴史博物館、長崎歴史文化博物館等であった。

#### 4. 研究成果

七代目団十郎を取り巻く観客・臯眞の解明にあたって、まず、七代目の臯眞連の支援活動について検討した。

七代目の代表的な臯眞連である「三升連」に所属している人々が中心になって、市川家に関する狂歌・俳諧集『市川白猿七部集』を刊行した。『七部集』の中で、七代目に関する冊子は、『團十郎七世嫡孫』と『江戸紫臯眞鉢巻』である。『團十郎七世嫡孫』は、寛政12年(1800)年11月に五代目海老蔵が七代目団十郎を襲名した時、そのお祝いとして、臯眞達が狂歌を創作し七代目に贈ったものである。『團十郎七世嫡孫』と『江戸紫臯眞鉢巻』の内容について、狂歌師が詠んだ歌、俳名、本名、居住地、職業という欄を設け一覧表にまとめた。『團十郎七世嫡孫』は、冒頭部分に代々の団十郎の略歴や得意な役柄等が紹介され、203首の歌で構成されており、全て七代目襲名を祝っての狂歌集である。

『江戸紫臯眞鉢巻』は、焉馬や南畝を中心とする団十郎臯眞の文人達が、七代目の「助六由縁江戸桜」初演に際し、狂歌を創作し、冊子にまとめたものである。二代目が初演した助六にはじまり、その後、助六を演じた役者名や評判など「助六」の歴史を、焉馬がまずはじめに記している。

この冊子は、289首の歌で構成され、「三升

連」を創設した烏亭焉馬の「春かすみ出しのきひたる河東節あんばいのよき替門の鯉」から始まり、大田南畝の「助六のあたりハ江戸の花川戸三升一刻あたえ千金」で締めくくられている。

両冊子を構成している人々は、狂言作者、戯作者だけでなく、落語家、料亭の主人、たばこ屋、古着商い、浮世絵師、蘭方医など様々で従来の江戸幕府の身分制支配秩序にはとらわれず、職業にも規定されず、あくまでも団十郎臯眞という共通目的のために集結している社会集団である。参加者の居住地は、江戸が多いが、小田原、大坂、佐倉、館山、陸奥、遠州、肥前に至るまで地域が限定されることなく広範囲にわたっている。遠方から歌を送っている人々の居住地域を訪れ、諸機関で関連資料を収集した。

こうした行為は、文人の特性を活かした團十郎に対する支援の一つの形態であり、それを社会に発信させたのである。

また、七代目は成田山新勝寺に対して深い信仰心を抱いていた。七代目の不動明王に対する信心は、代々の団十郎の中でも格別であった。特筆すべきは、文政2年(1819)6月、同7年7月の成田山境内における二度の芝居興行の実現と、同4年の千両寄進であり、これらはそれまでの団十郎にはみられなかった行為である。

文政4年3月15日から5月16日まで成田山は江戸出開帳を開催した。七代目はそれに合わせて不動明王の霊験記を上演したり、出開帳が行われた深川永代寺で取り持ち役を勤めたりと成田山の江戸出開帳に貢献していたが、その出開帳開催中に成田山額堂建立のために千両を寄進した。これは七代目生涯最大の寄進と言われている。この千両の寄進に合わせて、七代目臯眞の宿屋飯盛率いる狂歌集団「五側」が成田山へ扁額を奉納した。

この扁額は「四季混雑」と題され、「五側」の35人の狂歌が詠まれている。「五側」奉納の扁額には七代目自身も狂歌を寄せている。狂歌は特に共通テーマはないが、七代目の魅力や七代目を取り巻く江戸歌舞伎や七代目と成田不動明王を結びつけて捉えており、いずれにしても七代目賛歌となっている。この扁額に狂歌を寄せた人々の職業・家業は様々で、居住地も江戸の他、常陸江戸崎、高崎などの地が見受けられた。

狂歌連「三升連」や「五側」に所属し、七代目を支援する人々は、実名ではなくペンネームを用いる事で狂歌師として変身を遂げる。変身を遂げることによって、従来 of 身分制支配秩序から解放され、狂歌詠みを通じて身分・職業にとらわれない新たな社会が形成されていった。こうした社会が七代目の支援形態の基盤の一つであると位置付くのである。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

木村涼：七代目市川團十郎と成田山額堂寄進—「五側」の扁額奉納とともに—(『北総地域の水辺と台地—生活空間の歴史の変容—』、査読有、2011年10月刊行予定)

[学会発表] (計2件)

(1) 木村涼：七代目市川團十郎と成田不動信仰—文政四年額堂寄進を中心として—(地方史研究協議会第61回(成田)大会2010年11月 於成田国際文化会館大ホール)

(2) 木村涼：「勝扇子」の伝来について(第42回日本古文書学会大会2009年9月 於栃木県足利商工館)

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

木村 涼 (KIMURA RYO)

早稲田大学・演劇博物館・助手

研究者番号：70546150